

主張

金属労協副議長／全電線中央執行委員長 佐藤裕二

未来社会をつなぐ

「未来社会をつなぐのは私たちです」これは、本年度の全電線の運動方針の表紙に書き込んだ言葉です。

全電線は、電線および関連産業で働く労働者により組織された産業別労働組合であります。そんな我々の産業で製造している、電気を送電する電力用や音声・画像・映像などの情報を伝送する通信用など様々な場所に張り巡らされている電線は、日常生活や産業・経済に欠くことのできない社会インフラを支える資材であり、社会生活の動力となる電気や、コミュニケーションに欠かせない情報を伝達する重要な役割を果たしています。人間の体にたとえると、電線は血管や神経に相当するものとして、社会生活の向上、産業の発展、文化の向上に大きく貢献しており、私たちの暮らしを、より

豊かで心地よい未来へとつなぐ重要な役割を担っているものであると思います。全電線に集う組合員にも、デジタルトランスフォーメーションの進展、そしてその先の society5.0 に向けても、「未来社会をつなぐのは私たちだ！」そういった自覚・自信のもと、全員が力を合わせこの大変革の時代を乗り越えられるよう果敢に挑戦する。という思いを運動方針に込めています。

今できることを

今、私たちを取り巻く環境については、未だ収束を見通すことのできない新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが世界経済に大きく影響を及ぼし、日常生活、労働環境にも大きな制約を生じさせています。1年前は2020年東京五輪

を契機に、日本は様々な面で大きく変革を遂げるものと思われていました。しかし、感染症の拡大により状況が一変しました。東京五輪は延期せざるを得ない事態となり、4月には緊急事態宣言が発出され、人々は動きを止め、経済も停滞しました。日本だけではなく、世界が動きを止めたといった方が良いかもしれません。

外出自粛要請により、在宅勤務などを余儀なくされ学校も休校となり、人と対面する機会が大きく減少し、会議や打ち合わせ、学校の授業や講義もオンラインで行う機会が増えたと思います。緊急事態宣言が解除された以降も、新型コロナウイルス感染症の感染リスクが完全に無くなっていないことから、在宅勤務やオンラインでの会議開催の動き

は大きく変わっていないと思います。GOTOキャンペーン等の需要喚起策の効果で人々の動きは少しずつ活発になってきましたが、私たちは全電線の組織内でも、諸会議や研修はwebで行っているのが実態です。これも、デジタル化の進展による働き方の変革とみる向きもあると思いますが、毎日顔を合わせていた同僚や、膝を突き合わせて論議していた仲間と、パソコン画面上でコミュニケーションをとることが当たり前になってきた実態には、寂しさを感じる人もいると思います。

在宅勤務が何ヶ月も続いている状況で、従業員のやる気と関与を維持するにはどうすればいいのか。これは、2020年に多くの企業が突きつけられた課題だと思います。この数ヶ月の在宅勤務は、オフィスを拠

点とする従業員にとって、一長一短があるものだったと思います。デスクがベッドのすぐ近くにあつて、通勤時間を気にすることなく時間を有効に使えるなど便利だと喜ぶ人もいる一方で、職場が否応なく自宅に入り込んでくることなどにはマイナスな面もあり、リモートワークができる環境が整っているのか？また、社会的な交流の欠如などが主な問題となっているとも言われております。

そうした在宅勤務に焦点が当たっている中にあつても、工場などの現場では、変わらずに昼夜ラインを稼働させている組合員もいるのが実態でもあります。在宅勤務等でのテレワークに対する不安もあります。現場で変わらず作業する不安も大きいと思います。こういった双方の方の生の声を聞き、組合員が何を求めているのか？感じて、そして我々に何ができるのか考え実行することが重要だと思えます。

人と人とのつながりを

デジタルトランスフォーメーションの進展により、私たちの生活は便利になりました。数年前、いや1年

前でもwebを活用した定期大会の開催は考えられなかったと思えます。一方で、人と対面で接する機会が減ったことで、人と人との繋がりが希薄になったのではないかと心配する面もあります。

我々労働組合は、膝を突き合せ侃侃諤諤の論議するのが常であったのではないかと思います。現状はそれが許されるような状況には未だなっていないと思えます。しかし、コロナ禍で従来の活動が制限される中にあつても、我々の運動を止めることがあつてはなりません。ソーシャルディスタンスを確保し、3蜜を避けなければならぬ状況です。必然的に実際に相手と対面しない、距離をとるといった対応をせざるを得ない状況となり、日常的に行われる会議はwebを活用したものとなりました。画面上であつたり、マスク越しの会話では相手の表情も読み取ることが難しいものです。これからは、そういった環境にあつたとしても、相手の考えていることを理解する能力や自分の考えを伝える能力が今以上に必要になるし求められるスキルになっていくと考えます。デジタル化は私たちの暮らしを

便利に進化させましたが、それを使う人によっては不便と感じる人もいるかもしれません。webでの会議もそうかもしれません。しかし、デジタル化の進展にPCや周辺機器といったハード面だけでなく、ソフト面として我々もデジタル化にアジャストしていく必要があります。

「目は世界を」「胸に希望を」「足は現場に」

新型コロナウイルス感染症が終息したとしても、すべてが元の暮らしに戻ることはいずれでしょう。難しい時代になったからと言って、問題を先送りすることなく、我々も常に時代の変化に対応し進化し続けていくことが必要です。そのため

力を積み重ねていくことが重要であると考えます。

そのためには、常に広い視野で多くの出来事を見つめ、どうなれば、どうすれば良いのか常に考え、そして、現場に足を運び組合員が何を考えているか？ どう思っているか？ どうして欲しいのか？ 感じておくことが必要です。

「目は世界を」「胸に希望を」「足は現場に」これは、私の出身単組の先輩が、後輩へ残した言葉です。

困難な状況だからと言って立ち止まってはなりません。歩みを止めると何も変わりません。人は進化できませんし、困難な状況でもつながっていきます。そう、「未来社会をつなぐのは私たちです。」



金属労協副議長／全電線中央執行委員長
佐藤 裕二 さとう・ゆうじ

1969年12月生まれ
1988年4月 住友電気工業株式会社入社
2005年9月 住友電工労組 横浜支部執行委員
2008年9月 住友電工労組 横浜支部書記長
2010年9月 復職
2014年8月 全電線 中央副書記長
2016年8月 全電線 中央書記長
2020年8月 全電線 中央執行委員長 (現)
2020年9月 金属労協副議長 (現)